

空



2014・8

**SORA** 56号

白露

柴田佐知子

白鷺の降りし青田のあらたまる

菖蒲湯へ移す赤子はまだ覚めず

幟立て流れも空も濁りなし

白鷺が頭めぐらす青山河

寝返りもならぬ柩や麦嵐

青簾抜けたる風のやはらかし

町の子にはにかんでゐる日焼の子

番犬の真面目に守る薔薇の家

香水を付けて家居を楽しめり

参考書ばかりが増ゆる暑さかな

だんだんと箆筒の奥へ海水着

雷鳴の遠ざかりゆく逢瀬かな

死神がいつも控へてゐて涼し

三伏や走り根は山巻き込んで

湧水の芯より秋の立ちにけり

卓の上すぐ顔のある生身魂

火に投げし文がふくらむ白露かな

花氷 高倉和子

麦秋や心もとなき道の幅

鎌研がぬ父となりぬて昼眠る

対岸の人を呼びたる祭かな

大花火大きな声で応へけり

木下闇はじめて秘密持ちし日も

老僧のひらりひらりと来て涼し

花氷先に泣かれてしまひけり

母抜けしこの世は暑きばかりなり

生命線 中田みなみ

鼻先を風と過ぎたる初蚊かな

立姿浴衣は藍に限りけり

街川の灯影離れぬ団扇かな

子と酌むや顔たのしげな豚蚊遣

枇杷の種子歯にぶつかりて恐縮す

雨の日の笛の音が沁む蟻地獄

泉掬ふ生命線の長きこと

氷片のグラスに当たる夜の秋

被爆川

荒井千佐代

朱夏

服部早苗

太宰忌の蛇口より水ほとばしり

朱夏の空仰ぐ宗達も光琳も

初螢われを迎へに来しははか

かい掘りの沼や水木の花うかべ

植田にも潮の匂ひや高曇り

実桜や音楽室のほの暗き

五日目の雨となりけり金魚玉

若竹の伸び代空のどこまでも

さらさらと陽と砂こぼし荒布干す

発光体となりて玉葱夕まぐれ

百日紅生きるが為に死を思ふ

衣更へてあといくたびを折り返す

介護了へ夜の噴水を見てをりぬ

形代の沈みゆく身をすこし反り

西日中揺らぐ藻草や被爆川

ほほのうぶ毛愛らしきかな枇杷の雨

天神さま  
柴田志津子

子猫  
だいじみどり

朝顔の種蒔くころや幼稚園

仕舞ふのも出すのもひとり籐蓆

弁当ひらく天神さまの藤すだれ

蟻の列ホースの水をもて散らす

優曇華の文字つつくしくうとましく

踏板を持ち上げてゐる溝浚へ

夏立つや祠に過ぐる大櫓

当てにせず己を守る更衣

水打つてたちまち変る石の相

かうべ垂れ端居の前を通りけり

帰る子を見送る木戸や花みかん

子供たちばかりの島の虫送り

大干潟異形の魚の飛ぶ跳ねる

よく抜ける草いとほしく抜きにけり

梅雨の灯に最終便の着陸す

ばらばらに貫はれて行く子猫かな

金魚玉  
野上  
杏

沖南風や島の高きに烽火台

雨つばめ朝刊一束波止に着く

海を見る夏柑二つ足元に

郭公に近づく橋を渡りけり

おとうとの来てすぐ帰る麦の秋

曳いてゆく蟻には大きすぎる羽

傘の滴切つてより押す梅雨のベル

金魚玉の横にさし出す診察券



千葉 原 友 子

六尺は竹の子以上竹未満  
潔ぎよく火に滅びたる菜殻かな  
端つこの夜店に墓地の風が来る  
充電を終へたる色の実梅かな  
飢えて死すとき天国へ蟻地獄

糸島 小 林 朱 夏

遠蛙年とるために今日も食べ  
螢狩牛の反芻まだ続く  
サンガラス街が海底都市となり  
留守番に気の抜けてくるラムネかな  
もの銜へ鴉は鳴けず大夕焼

福岡 樋口みのぶ

涼しさや参内近きタキシード  
宮殿は目を見張るのみ汗拭ひ  
汗拭きて市井へ戻る二重橋  
振り向けばもう照り霞む皇居かな  
夏掛けの母に勲章付けにけり

糸田 宮 井 知 英

夏来たる白一色の慈母観音  
涼しさや庭まで匂ふ青畳  
逆立つる柳眉など無し夏の月  
赦すとは愛する事よ浮いて来い  
頑張ると言ふはどこまで籠枕



粕屋 秋 千 晴

地域あげ清掃済ませ海開き  
浮輪つけ走り出したる海開き  
夏帽子顔半分影つけて  
夏帽子脱げば浜辺の影縮む  
身丈より月影長き浜辺かな

福岡 矢野 百合子

ぎしぎしや夕日受けつつ下校の子  
寝釈迦さま足裏に蠅を遊ばせて  
蟾蜍鳴いて全山押し潰す  
涼風や上がり框の丈やさし  
京紅の残りし貝や夏深し

粕屋 吉田 菫

朝方はあられもなく竹婦人  
昼からの刻の長さや未草  
ただ笑ひ合ひたくて逢ふサイネリア  
何もかも気に入らぬ半夏薊  
はらわたもみな食ひ尽くす大暑かな

須恵 苑 実 耶

一族の墓石囲む著莪の花  
若葉寒鰯化の叶はぬ卵かな  
風の中に新茶を汲めば父のこと  
着流しの漢金魚の袋下げ  
抱けば泣く子にさくらんぼ揺らしをり

# 空集

柴田佐知子選



払ひたる火蛾の銀粉浴びにけり

骨に皮張り付いてゐる蛇の顔

夏草やましろきふくらはぎふたつ

風鈴や明日の目覚めを疑はず

先生も更衣して校門に

粕屋 秋 千晴

お守りも日焼けしてゐるランドセル

真直ぐに立てて持ちたる菖蒲かな

シーソーの日焼子が父見下ろせる

蚕豆を剥きつつ母に今日のこと

辣蕪を洗ふ指紋の薄るるまで

シャワー浴び術後の五体確かむる 糸島 小林朱夏

草刈や息吹き返す灘の風

日焼子の手伝ひ足手まとひなり

箱庭や家人の出入りは勝手口

遮断機の降りるさまなり暑氣中り

根無草ひとかたまりに流れけり

兵庫 戸栗末慶

蛇の衣かかりし櫃のしづかなり

写真の母いつも紺や麦の秋

田を植ゑて送電線のおそろしき

青梅や老いて故郷を近くせり

捕虫網国旗のやうに掲げ来る

捕へられたきは彼の日の捕虫網

京都 天谷翔子

走馬燈逢へなきままの顔照らす

七夕竹独り暮しの高さなり

嬰粟ひらくあまたの軍靴過ぎし地に

豌豆につま先立ちを強ひらるる 千葉原

友子 パナマ帽とれば普通の人でした

ラムネ飲む喉に若さのほとばしり

甚平や隠しきれざる夫の骨

迷ひなき鋏の音や浴衣裁つ

骨からも汗は出るらし夫の貌

髪すこし切りて人待つ緑雨かな

膝の土はらひて終る草むしり 福岡 柴田志津子

七色の塔あらはれよ虹の上

あたたかや鶏鳴ながきなまこ塀

野性味の無き子そろひしキャンプかな

町薄暑こんなところに鯨塚

金目鯛かまの裏まであかあかと 粕屋 吉田 葎

夫の名の消えし形代流しけり

兜虫大鋸屑しかと胸に抱く

何ごととも一が好きな子夏の雲

幼な児の高さに蟬を放ちけり

皆が見てゐる落ちさうな燕の子 大阪 織田高暢

老園丁薔薇の中より現るる

東京五輪までは生きるぞ冷奴

寸劇の老婆のくれし青林檎

さつきから空の何見て生身魂

源氏螢少女の指を選びけり

炎帝の丸ごと愚か者愛す

夕焼の丘に連れ出す人が欲し 福岡 白水良子

その中の菌なる我や大銀河

睡蓮鉢二輪も咲けばいつぱいに

ふる里に帰らぬ月日げんげ摘む 兵庫 石川叔子